
タバサ 雪風の名をもつ少女

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タバサ 雪風の名をもつ少女

【Zコード】

N7035D

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

ある日の昼下がり。図書館でタバサとあつた才人は自分の世界の歴史を彼女に話し始める。そして、彼はその中で、彼女の2つ名と重なる船の話をはじめる。

(前書き)

初めてのゼロの使い魔の小説ですよよろしく。

ある日のトルステイン学院。この日才人は図書館にいた。最近になつてこちらの世界の文字をマスターした彼は暇つぶしに本でも読もうかと思つたのだ。

ちなみに、彼のご主人様はといふと、メイドのシエスタと、才人と一緒に今度の虚無の曜日に出かけるデーター権を掛けて、才人手作りのトランプで神経衰弱の真剣勝負中である。

「まったく、あの2人は懲りないな。」

原因である人間がよく言つわ。

昼下がりで授業が終わつてゐるのか、図書室には随分と生徒が集まつてゐる。そんな中で、彼は机の隅に座り、一心不乱に本を読んでいる人間を見つけた。そんな生徒はこの学院内でただ1人であり、才人にも馴染みの人間である。

彼はその人物に近づいた。

「ようタバサ。」

才人が声を掛けた人物は、眼鏡を掛けた小柄な少女であった。タバサである。

彼女はちらつと視線を才人の方に向けたが、すぐに本へと戻した。

「て、つれないな。挨拶したんだから何か言えよ！」

する。

「何か……」

タバサは才人の顔も見ずにただ一言やついた。

「何かつて……また使い古したギャグを。」

この少女のマイペースぶりは多分100年経つても変わらないだろうな等と考えつつ、サイトはタバサの隣の席に静かに座った。

「一体何の本を読んでるの?」

そう聞いてみると、再びタバサは視線を変えることなく答えた。

「歴史の本。」

「おもしろい?」

もし面白いのなら自分でも読んでみようかな等と考えたのだが、タバサの答えはというと。

「おもしろいかはわからない。興味がなくちゃ読まない。」

簡潔かつ素っ気無く答えるタバサ。才人はその答えにただ苦笑いするしかない。ただ、感心もしていた。歴史といえば彼の中ではお堅いイメージがある。そういう種類の本を読むということは、タバサは勉強家であるのだと考えてしまう。

と、そこで彼は自分が知っている歴史といつのを考え直した。自分は地球人である。もちろんだが、この異世界の歴史など習つたこともないし、ほとんど知らない。向こうの世界の歴史にしても、かなり偏つた知識しか持ち合わせていない。

タバサの様子をみていると、そんな自分の知識を考え直してしまう。もしかして、直した方が良いのではないかと。

「うーん……」

ついつい口に出してしまった才人。すると、タバサが反応した。

「悩み事は早く片付けると良い……」

その言葉にギョッとする才人。

「タバサ……変な所に敏感なんだね。」

（そう言えば、前にコールベル先生が髪を落とした時にも小言ついていたよな。）

そんな事を考えたが、再び先ほどの思考を再会させる。

（うーん、歴史をもう一度覚えなおした方が良いかな？）

「覚えなおした方が良いよな。多分。」

「何を？」

タバサが相槌を入れるように言った。

「歴史だよ歴史。俺つてこいつの世界の歴史を殆ど知らないし、おまけに自分の世界の歴史も偏った知識しか持っていないし。」

と、ここでタバサが突然本を閉じた。

「うん？タバサ？」

どこかへ行くのかと思ったら、タバサはそのまま才人の方に顔を向けた。

「聞かせて？」

「何を？」

「あなたの世界の歴史・・・」

これには才人も面白らつた。いきなりこんなことを聞かれるなんて。

（タバサ意外と物好きだな。まあ、どうせ暇してたし。）

「いいぜ。」

そう安請け合いして才人は話をし始めたが、話している途中で自分の浅学を思い知らされることとなつた。なにせ、彼が言える歴史は645年の大化の革新とか1192の鎌倉幕府開設とか言った語呂で覚える物や、1600年の関ヶ原の戦い等の切の良い年の物ばかりであった。おまけと来て世界史はあまり分かつていなかつた。そのため、大分筒抜けになつてゐる部分も多かつた。

ここに来て、才人はしみじみと思った。

（もつと学校の授業しつかり聞いておくべきだった。）

習えるうちに習つておく。今になつて改めて学校教育の偉大さを思い知られた才人だった。

ただし聞いているタバサのほうは、例え虫食いのように穴だらけの歴史であつても、やっぱり新鮮さの方が大きく、興味深く聞いていた。

才人の話す歴史は徐々に下り、いよいよ1900年代に入った。この時代に入ると、ミリタリーマニアであつたせいか、話す話題の多くが戦争関係というかなり物騒な物になつた。ただし、タバサはそれらも顔色一つ変えずに聞いていた。

もつとも、タバサからしてみればやっぱり機械文明というものにピントこなかつたらしい。また、戦争が何年続いたとか何万人死んだとか聞いてもやはり実感がわからなかつたらしい。

しかし、才人が日本の戦争、特に太平洋戦争の事を話し始めると彼女にも少しばかり恐怖のような感情が生まれた。何故ならそれまでは暗記した内容を淡々と言つている感じだった才人の話し方が、大分熱を帯びてきたからだ。

満州事変。盧溝橋事件。日中戦争。南京事件。第一次大戦の始まり。真珠湾攻撃。ミッドウェー海戦。ガダルカナル島を巡る凄惨な戦い。

才人はこの方面的知識はあったので、詳しく具体的に話すことが出来た。

タバサは表面上は冷静を保っていたが、やはり内心では才人の世界で繰り広げられた未曾有の大戦争に対する恐怖が増幅しつつあった。

そして、才人の話は特攻に及んだ。

「特攻って？」

聞きなれない単語に質問を連発していたタバサであったが、この時になると声に震えのような物が含まれていた。しかし、話すのに夢中な才人はそれに気付かない。

「特攻っていうのはだな、タバサも俺が乗るゼロ戦は知っているよな？」

その質問に、タバサは小さく頷いた。

「ああした飛行機に爆弾をくくりつけるんだ。そして、そのまま敵の軍艦に体当たりするんだ。パイロット、つまり操縦している人間もろともな。」

タバサは信じられない思いとなつた。確かに戦いで死を前提に覚悟を決めて戦う事はある。しかしそれは決死であつて必死ではない。それに殺すのは相手だ。そんな自分から死ぬような戦いをするなど気違いである。

「ありえない。」

彼女はボソッと言つ。

「そりやあ普通の人間からしたらありえないけど、俺の国はそれをやつたんだ。つい60年前。そして、4000人以上の人間がそうやって死んだんだ。」

「・・・」

「その後、広島と長崎っていう街に原子爆弾って言う一発で町一つを吹き飛ばす爆弾が落とされて、30万人も死んだ。そして8月15日に日本は降伏して戦争は終わった。」

「才人の国は負けたの？」

国が負けるということは、国が滅ぶ事ではないのかとタバサは考えた。

「うん、確かに負けた。けど、日本が滅んだわけじゃなかつた。その後日本人は憲法で戦争を禁止して、努力して国を立て直した。おかげで世界で2番目に裕福な国になつたんだ。」

最後の戦後はかなりすっ飛ばしたが、才人の歴史の話はそこで終わつた。

「ごめんね、暗い歴史しか話せなくて。」

再び自分の偏った知識に恥じ入る才人。しかし、タバサは表情も変えず一言だけ言つた。

「ううん。ありがと。」

そしてタバサは立ち上がりとした。その時、才人はあることを思い出した。

「もう言えばタバサの「つづって雪風」だつたよな？」

「ううだけど・・・それが何？」

「いや、たゞさうしてた戦争の最中にあつた軍艦で「雪風」つて船があつたんだ。」

タバサはそれが一体何なんだと思つた。単に名前が一緒なだけではないか。

「その船は大きさが2000t位の軍艦としては小さな船だつたんだ。同じ型の船も20隻ぐらい造られたんだけど、そんな中で、その「雪風」だけは幸運艦つて呼ばれたんだ。」

「幸運艦？」

「うう。3年8ヶ月の戦争の中で、他の同型船が次々と沈む中、その「雪風」だけは沈まなかつたんだ。そして一度も大きな損傷を被らなかつたんだ。だから幸運艦つて呼ばれたんだ。」

タバサは確かにそれは幸運だなと思つた。戦争の最中に損傷を負わない事などよっぽどだ。

「そして、もう一つその「雪風」には伝説があるんだ。」

「何？」

「その「雪風」に乗った人間にも幸運を与えるって話だ。まあ確かに、実際にその船に乗って後々有名人になつたりした人はいたらしきけど。だから今でも「雪風」ていう名前に愛着を持つている人は多いらしいぜ。もしかしたらタバサも、幸運を運ぶ魔女かも知れないな。」

その言葉を聞いて、タバサは少し黙つていたが。

「私はそんな柄じゃない。」

と素っ気なく答えた。

「そう。」

「お話ありがとう。」

「ああ、またなんか聞きたいことがあつたらいつでもしてやるぜ。」

そしてタバサは立ち上がると本を持って図書室から出て行つた。そんな彼女が、廊下に出て。

「幸運を運ぶ魔女か・・・」

と呟いて、微笑んだのを知る者はいない。

そして、オ人はといふ。

「オ人！！」

「才人さんーー！」

突如彼の前に喧嘩していたはずのルイズとシエスタが現れた。

「うわーー！2人とも何時の間に来てたの？」

才人の質問に2人は答えようとしなかつた。その表情は笑っているが。

（目が笑っていないぜ・・・）

2人が怒っているのは明らかだ。

「才人！あなたタバサと何真剣そうに話してたの？」

「ふえーー？何って、俺の世界の歴史を教えてただけだよ。」

「本当ですか？」

「嘘とと思うならタバサに直接聞けばいいじゃん。」

その途端、彼は2人に首根っこを掴まれ連行された。そして、彼はこう思った。

（おいおい、タバサはもしかして不運を運ぶ魔女か？）

そして3人はタバサの部屋に着いた。ドアをあけるなりルイズがまくし立てた。

「ちょっとタバサ。」

机で再び読書を開始していたタバサは、本を置くと突然の来客に不機嫌そうな顔を向けた。

「何？」

「さつき図書館で才人さんに才人さんの世界の歴史を聞いていたつて本当ですか？」

「そうだけど……」

「本当にそれだけ？」

「そう……」

タバサはただそれだけ言った。

一方で、才人はグロッキー寸前だった。

（頼むからその手を2人とも早く離してくれ……）

「あ、そうだつたの。」

「失礼しました。」

ルイズとシエスタは才人を引つ張つて部屋からでた。そして、2人とも才人から手を離した。

「ゲホゲホ……」

むせる才人。

「『、『めん才人变に疑つたりして。』

「『めんさい才人さん。』

ルイズは取りあえず謝り、シエスタは頭を下げた。

「いや良いつて、一人とも分かつてくれたなら。人は誰でも勘違いの一つや二つするもんだから。」

その言葉に、2人とも表情が笑顔になつた。そして。

「まあ才人がそう言うなら。まあ今回は私の誤解だつたし、罪滅ぼしつてわけじゃないけど、夕方城下町のレストランにでも連れてつてあげる。」

これには才人も驚いた。滅多にない幸運である。

すると、負けじとシエスタが言つ。

「ずるいですよミス・ヴァリエール！－才人さん、それよりもマルトーさんに頼んで、いつもよりも豪華な食事でおもてなししますわ。

』

「え、ちょっと2人とも！－そんな一遍に言われても、取りあえず今日の夜はルイズで、シエスタは明日にしてくれないかな。』

才人が妥協案を提案した。普段なら大抵ここで口論になるのだが。

「うーん、わかりました。才人さんがそう言つなら。」

（あれ？シエスタが随分簡単に引き下がつたな。）

とにもかくにも、こうして才人は2日間、豪華な夕食にありつけることとなつた。そして彼は思ったのである。

（やっぱり、雪風のタバサは幸運を運ぶ魔女かも）と。

(後書き)

御意見・御感想・御批判をお待ちしています。

なお、今回サイトがミリタリー系の知識があるといつのは原作でもまだ未確定要素の設定である事を付け加えておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035d/>

タバサ 雪風の名をもつ少女

2010年10月15日01時39分発行